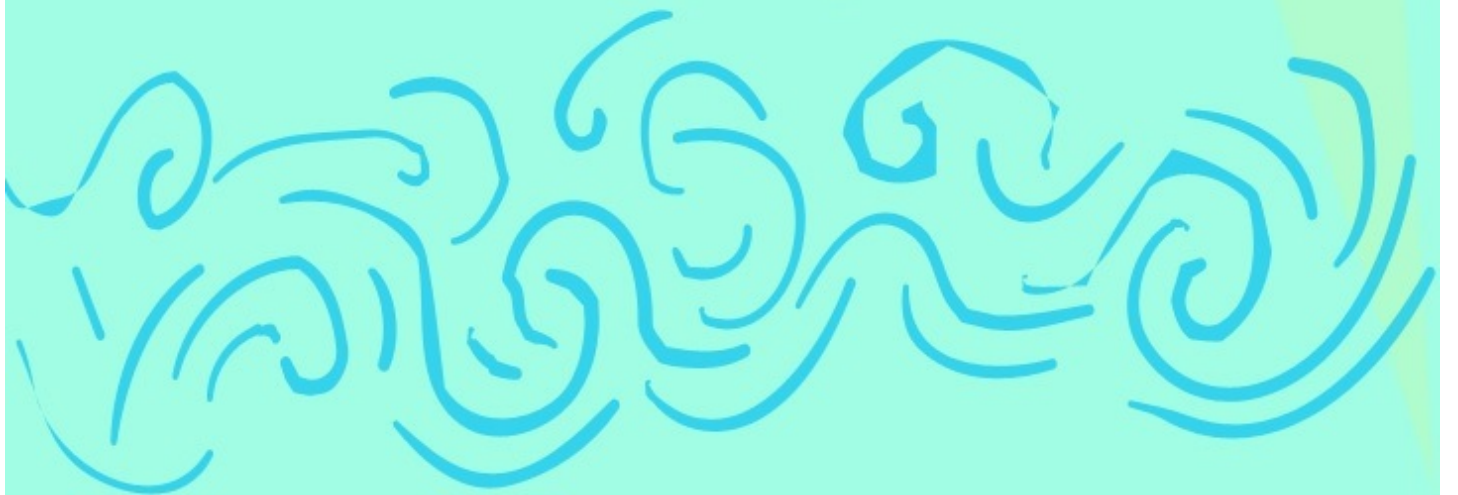


都
志
司
無
意
織
女
ク
ラ
ッ
シ
ヤ
一



秋野倫がパートから帰ると娘が何か泣いていた。どうせいつものように姉妹喧嘩だろう。そう思った。けれど、どこか違和感がある。いつもと違ったのは取っ組み合いの喧嘩ではないということだった。普段なら髪をひっぱり爪を立て、女の子なのに時にはグーで殴り合っている。しかし、今日は理乃だけが泣いていた。携帯を手に持って。

「どうしたの？ 喧嘩？」

どちらが悪いの、とは聞かない。聞くことが無意味だからだ。前に聞いたことがありそのときさらに喧嘩を始めた教訓でもある。大概の場合どちらにも原因がある。

「喧嘩じゃ、ない」と良子が言った。

「じゃない」と理乃が言う。

「??」

倫は首をかしげた。泣いているのに二人して喧嘩じゃないと否定をする。不思議だった。

「じゃあ、どうして理乃ちゃんは泣いてるの？」

しゃくりながらも二人は少しずつ交代で話した。けれども、倫は話の内容の半分以上を理解することができなかった。愕然とした。

そもそも倫はパソコンに縁がない。パソコンに触るのは掃除のときくらいである。電源ボタンがどこにあるかすら知らない。昔勤めていた会社ではワープロやコピー機が使えるればそれで問題なかった。今のパートでもパソコンは若い子が率先してやってくれるし、倫の仕事はもともとパソコンを使わない受付での接客仕事だった。

「ついた？ 炎上？ 脅迫？ あかうんと？ たいむらいん？」

「でもね。もう解決したから大丈夫だよ」

「うん。そんな顔しなくても。お母さん」

「一体自分はどんな顔をしていたというのだろう。」

「あ、もしかしてわからない？」

「勘の良い理乃が尋ねた。」

「そ、そそそ。そんなことないわよ」

「そんなことあった。わからない。まったくなんのことを言っているのだろう。」

「その脅迫文が書いてあるついたって紙が燃えて広がってたくさんのあかうんとに迷惑をかけてたいむらいんがごちゃごちゃになったんでしょ。それで良ちゃんが広がるりついとを配って【理乃ちゃんは謝ったからもう悪くない】って知らせて解決したんでしょ」

「苦し紛れに聞いた話をまとめてみたけれど、自分でも何を言っているのかわからなかった。」

「間違ってるわけじゃないけど、」と良子。

「わかってない」と理乃。

この日から娘二人によるパソコン講座が始まった。受講者は倫ひとりである。

まずは電源の場所を教えてもらった。

最初、理乃が電源をつけて待ってると部屋に戻ったので、倫は電源を探しながら待っていた。ところが見つからない。パソコンの電源は側面にあると思い込んでいたので倫は筐体の側面をくまなく探していた。しかし、ボタンは見つからなかった。正面を見てもボタンなどない。裏側を探していると理乃が二階から戻って来た。すでに先生モードである。

「何してるんですか？」

「……」

理乃によるとボタンは正面の中央画面下にあった。「これボタンじゃないよ！」と倫が抗議すると、理乃は「これが電源マークです覚えておきましょう」と苦笑いをした。一体どっちが親なんだか。倫にとってボタンとはかちっと押すものであって、ただ触れるだけで電源がつくだなんて知らなかった。

「えーっと。これはウィンドウズ7っていうOSで電源をつけたらログイン画面が出ます。とりあえずGUESTでログインしましょう」

どうやって??

わからないから、画面に触れた。理乃が笑った。しかし、画面は切り替わる。このパソコンが少し前のものだったら、馬鹿にされていただろう。しかし、割と最近買い換えたばかりだったため、画面にタッチパネル機能がついていた。理乃は知らなかったようだ。素に戻って驚いている。

「ええっ。これタッチパネルだったの。へえ」

「知らなかったの？」

もちろん倫だって知らなかった。

「……。私は画面なんかに触らないもん。でも、マウスを使いましょう。タッチパネルは直感的に操作できるでしょうが、一時間も二時間も操作していたら筋肉痛になりそうです」

確かに画面が縦に固定されているのにいちいち画面を押して操作するのは大変だ。倫はマウスを持って理乃の指示に従った。

「最初は、操作に慣れることから始めましょう。そうですね。ペイントで絵でも描いてみましょうか」

「まず、左下のスタートボタンを押してプログラムが一覧できます。そこにアクセサリというフォルダがあって、そのなかにペイントが入っています。開いてみましょう」

倫は理乃の言うとおりにペイントを開いた。

「はい。あとは適当に線を引いたり、文字を入力したり、色を塗ったりできますので何か一つ作品を作ってみましょう」

「はあい」

「私宿題をしてきますので、しばらく適当に絵を描いていてください」

理乃が宿題を終えて、参考書で勉強をし始めたとき、階下から理乃を呼ぶ声が聞こえた。

りのちゃーん。ねえー。なんか画面が変になったんだけど！

「はい」

理乃がパソコンの画面を確認すると、まるでテレビの0チャンネルを写したかのように画面に砂嵐が映っていた。

「ぼーっとしてましたか」

「はい。すこし。次は何を描こうかなって」

「これはスクリーンセーバーといって一定時間操作がされないと自動的にこの画面になるのです。問題ありません」

「そうなの。良かったわ」

「では、完成したら呼んでください」

理乃はまた二階へ戻る。しかし、十分も経たないうちにまた階下に呼び戻された。

「どうしました？」

「パソコンが動かないの」

「フリーズですね。再起動しましょう」

再起動している間に理乃は参考書と筆記用具をリビングへと持ってきた。勉強しながら指示を出そう。その方が早い。これ以上放っておくとパソコンが壊れそうだ。母は無意識なクラッシャーである。しかし、結果的に勉強道具を持ってくる必要はなかった。

再起動され、GUESTアカウントでログインしたら、画面に見たこともないような奇妙な虫がふよふよたくさん漂っていたからである。本当に奇妙な虫で、細長く目が三つほどあり、カラフルな体をしていた。

「「きもっ」」

二人の声が、はもる。それくらい数の虫がふよふよ浮かんでいた。

「どうしよう。これ15万円くらいしたのに！ お父さん怒るんじゃないかしら」

「うーん。でも、動作に問題はないから。ちょっと画面が醜いし見にくいけど」

ちょっとどころではなかった。きもい虫を透過して後ろの画面が見えるとはいえ相当見難くなっていた。バイトから帰って来た良子に話を聞いても知らないという。ただ良子はこの気味の悪い虫に見覚えがあるという。どこかで見たような気がするそうだ。

結果、三人で黙っていようということになった。もう一度電源を落としたら消えているかもしれないし。父がパソコンを使うのは週末しかない。

「ま、ばれたらばれたとき。謝れば良いよね」

倫は四十過ぎにして、てへっと娘たちに笑った。おそらく夫にばれたときも同じように笑ってごまかすのだろう。

「そうだよ。ま、大丈夫だと思う。父さんは割と詳しいし。それより、お腹すいたから夕飯作ろうよ」

三人は、そのままパソコンの電源を落とすと夕飯を作り始めた。